

根来山げんきの森俱楽部

令和7年12月作業日誌

活動日..令和7年12月21日(日)9時分30分

天気..雨

参加者..俱楽部員45人

炭出し作業 須山 佳則

本日は、13名の参加で炭出し作業を行いました。今日は本降りの雨です。まずは炭が濡れないようにしようとSAさんの提案で屋根作り。このおかげで倉庫までの通路が確保されました。

高野山向け30kg 一般向け220kg 合計250kg 出来ました。今年の生産量は通年を上回り2760kgとなりましたが需要が多く一般の方々に販売できなく申し訳ありませんでした。



来年も毎月生産したいと思いますので炭材伐採薪割り作業等ご協力よろしくお願ひいたします。今回のトピックスは SIさんの考案による炭材入り口のブロック製作です。今まででは、15個の思いセメントを使っていましたが6個のブロックで密閉できるようになりました。また、焚口が劣化して土が落下しそうになっていたため補強しました。
皆様お疲れさまでした。

大掃除 岡田 和久

朝から雨。夕方まで雨。久しぶりに一日中降り続く冬の雨の中、40人以上の俱楽部員が集まって大掃除と炭出し作業を行いました。

大掃除班は管理棟班、体験棟班、作業道具確認班の3班に分かれてそれぞれの作業に取りかかりました。

管理棟班は部屋の机や椅子などの家具類や棚の上の書類などをすべて運び出し、本棚をはじめ棚類や冷蔵庫の上、クーラーの内部、壁などをきれいに吹き取った後、床を水拭きしてそこに塗料を塗ったのですが、湿気の影響でなかなか乾燥してこなかったので部屋を閉め切って暖房とストーブで部屋を乾燥させてみました。

お昼を食べた後、何とか運び込めそうな状態になったので部屋を元通りにしました。

体験棟も同じように部屋のものをすべて運び出したして床の水拭きと塗料塗をしたのですが、こちらにはたくさんの木工関連の部材が溜められており、それらを整理し直す作業がけっこう手間取りました。

おかげで管理棟も体験棟もきれいになりました。見た目はそんなに変わらなくても細かい汚れやほこりがなくなっただけでその中で過ごす空気感が変わっていて、すごく清浄な空間にいる感じになるのはなぜなのでしょう。心地よく過ごせます。

作業道具の確認も無事に終わりこの日の大掃除は無事に終えることができました。

昨年までは最後のオープン日に10人ほどのメンバーで行っていた大掃除ですが、今年初めて俱楽部の活動日に行ってみました。いい雰囲気で行えたので、来年以降もこのような形でやっていきたいと思います。みなさん、よろしくお願ひいたします。

ピッカピカ！



道具小屋、屋根の竹取り替え作業

林 哉也



もう、20 年以上も前に建てられた寄せ棟の道具小屋。4 方向に棟が合っている部と、その頂上に体裁に施された半割りの竹のほとんどが、朽ち落ちているため、新しい竹(孟宗竹)に取り替えました。

活動日 21 日が雨でしたので、22 日に深慮深いHさん、途中から応援に来てくれた女史Mさんの3名での作業でした。

先ず竹の半割りです。「木元竹末」を忠実に、先の方からナタを入れて、半々の想いがどういう訳か、四分六くらいの結果となりました。まっすぐな竹はほぼ無く、ほとんどが節の部分で曲がっている為か、はたまた腕が悪いのか?でも、そこはナタとカンナで何とか調整し、表裏の節を取り、いよいよ屋根への取り付けです。

竹は前回同様、ビスで取り付けました。

棟と棟が合っている頂上の部分の收まりをどうしようか?、そこは深慮深いHさんを頼りに決めていきました。

屋根の作業は、「落ちたらあかん!」との想いが終始ありますので、知らず知らずのうちに足に力が入り、思いの外疲れます。この竹はこの先何年がんばってくれるのかな?出来るだけ永く体裁を保って欲しいなあ~つ、との願いを込めて丁寧に固定していきました。

作業が終わって見上げた屋根は、20 年以上前に蘇って、若返ったかに見えた様な、見えなかつた様な…でも体裁が良くなつたので、とてもスッキリした屋根になりました。

この 1 年間、大きな事故もなく、無事に作業を終える事が出来て良かったです。

皆さん、本当にお疲れさまでした。そしてありがとうございました。



事務局から

「冬の落葉樹林」

冬の落葉樹林で裸になったコナラやヤマザクラの枝が天に向かって伸びていました。緑の森と違い、余分なものを落としてスッキリと軽やかな落葉樹の枝の何と自由な事でしょう。私たちが生きていくうえで体や心にまとわりつかせてきたもの、それらは私たち各々の大切な個性ともいえるのですが、年を重ねてみると何とも重々しく感じてくることがあります。冷たい青空にくっきりと伸びた冬の落葉樹の枝を見上げていると、未練がましく必要なものまで持ち続けてくるのかなと、ちょっぴり考え込んでしまうのです。余生などという言葉は使いたくありませんが、これから的人生、できるだけ軽やかに生きてみようか、そうつぶやいた言葉が新春の青空に吸い込まれていきました。 (岡田 和久)